

- 「損保ジャパン日本興亜福祉財団賞」受賞記念講演会・シンポジウムを開催
- 「自動車購入費助成」「住民参加型福祉活動資金助成」の助成先を決定
- 「住民参加型福祉活動資金助成」関西贈呈式の開催
- 財団からのお知らせ
- 「海外助成」助成先訪問 in ミャンマー

発行者 公益財団法人損保ジャパン日本興亜福祉財団

〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1 損保ジャパン日本興亜本社ビル TEL：03-3349-9570 FAX：03-5322-5257

https://www.sjnkwf.org/ Eメール：office@sjnkwf.org

2019年度

vol. 2

2019.11.28発行

第20回損保ジャパン日本興亜福祉財団賞 講演会・シンポジウムを開催

7月13日（土）東京都千代田区のグランドアーク半蔵門にて、「損保ジャパン日本興亜福祉財団賞[※]」の受賞記念講演会、シンポジウムを開催しました。大学関係者、学生・研究者、企業・行政の担当者、社会福祉団体関係者の皆様など、110名以上の方にご参加いただきました。

※「損保ジャパン日本興亜福祉財団賞」とは

社会福祉分野における優れた社会福祉学術文献を表彰する制度です。社会福祉の学問的探求を志向する多くの学者、研究者の研究意欲を促進し、社会福祉の発展に寄与することを目的としています。

第Ⅰ部では、第20回「損保ジャパン日本興亜福祉財団賞」の受賞者、永野 咲氏（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科助教）が、受賞著書『社会的養護のもとで育つ若者の「ライフチャンス」－選択肢（オプション）とつながり（リガチュア）の保障、「生の不安定さ」からの解放を求めて』について講演されました。

第Ⅱ部では、『不利の連鎖の中にある「若者」のライフチャンスを保障するために』をテーマにシンポジウムを開催しました。会場からの質問も踏まえて、白熱したディスカッションがなされました。

参加者からは「負の連鎖は久しく論じられているが、社会的養護を受けて育った若者の追跡調査があまりされていないことに驚いた。」「児童福祉分野で新しい視点をいただいたように思った。政策や世論に反映することを望んでいる。」「社会的養護を巣立った子どもに関心を持つ社会の姿があってもいいのではと思った。」「若者・子どもの貧困は様々な要因が重なり合っていること、1つの原因ではないということ考えた。」「いろいろな視点から見る貧困や課題や実態について知ることができ、支援のあり方についても当事者が本当に必要としていることを考えさせられた。」「様々な観点から社会的養護に関する研究を進めているリアルなまた視線の異なる話を聞いて貧困をめぐる日本の現状や教育が若者の未来においての課題として強く認識した。」など多くの感想が寄せられました。

【シンポジウムご登壇者】

コーディネーター：岩田 正美 氏
〔日本女子大学 名誉教授〕

パネリスト：上間 陽子 氏
〔琉球大学大学院教育学研究科 教授〕
：佐々木 宏 氏
〔広島大学大学院総合科学研究科 准教授〕
：宮本 みちこ 氏
〔千葉大学・放送大学 名誉教授〕

コメンテーター：永野 咲 氏
〔昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科 助教〕



永野 咲 氏



シンポジウム



懇親会

自動車購入費助成 助成先を決定

東日本地区を対象に、6月から7月にかけて公募したところ、98件の応募をいただきました。障害者に対する福祉活動などを行う以下の10団体を対象に合計約1,150万円の助成を決定しました。

2019年度 自動車購入費助成 助成先一覧

所在地	団体名	主な事業
北海道	特定非営利活動法人 アラジン	リサイクルショップ、印刷・発送作業、手作りの製作・販売、畑作業、イベント参加事業
青森県	特定非営利活動法人 恵の里	空き缶回収、産業廃棄物の解体、銅線の加工などの就労継続支援事業
宮城県	特定非営利活動法人 ポラリス	農福連携、福福連携、観福連携による施設外就労、アート活動などの就労継続支援事業
秋田県	特定非営利活動法人 ハートランドひまわり	チョコット手伝い隊、杉の箸の手作り体験などの就労継続支援事業
埼玉県	特定非営利活動法人 こどもの木	発達障害児が友達と力を合わせ、外出活動などで活動範囲を自分で広げていくための支援
千葉県	特定非営利活動法人 自立支援ネット我孫子	精神障害者の弁当製造および販売、リモコン内職、近隣スーパー清掃を行う就労訓練事業
神奈川県	特定非営利活動法人 レジスト	コーヒー豆の焙煎販売や納品業務などの就労継続支援事業
静岡県	特定非営利活動法人 臨床心理オフィスBeサポート	未就学児対象の児童発達支援、小学生対象の放課後等デイサービス
愛知県	特定非営利活動法人 幸せつむぎ	放課後等デイサービス、児童発達支援、障害に関する学習会などの啓蒙活動
三重県	特定非営利活動法人 あぐりの杜	農福連携の水耕栽培で野菜を栽培、アート事業、さをり織りなどの就労継続支援事業

※助成金の贈呈式は、損保ジャパン日本興亜の支店と協力のうえ、助成先団体にて開催する予定です。



2018年度 贈呈式の様子



2018年度 贈呈式の様子



助成先団体の活動の様子

住民参加型福祉活動資金助成 助成先を決定

西日本地区を対象に6月から7月にかけて公募したところ、66件の応募をいただきました。地域住民が主体となって、組織的かつ継続的にボランティアな活動に取り組んでいるかなどを基準に、以下の18団体に総額462万円の助成を決定しました。

2019年度 住民参加型福祉活動資金助成 助成先一覧

所在地	団体名	助成する活動の名称	所在地	団体名	助成する活動の名称
滋賀県	生活支援ボランティア にんにんおたすけ隊	にんにんおたすけ隊 (気軽に助けて と言えるまちづくり)	和歌山県	おのみなと こども食堂の会	こども食堂を通じた地域の共生活動
滋賀県	にじいろ運営委員会	にじいろ教室 (認知症予防、英会話教室、そば打 ちなどの夏休み講座)	島根県	えくぼ	高齢者の介護予防・認知症予防と子 育て支援事業 (シンセサイザーの購 入)
京都府	「くらしの応援隊」 ボランティアの会	高齢者や障害者の生活支援、災害ボ ランティア部門の後方支援	徳島県	特定非営利活動法人 フードバンクとくしま	移動こども食堂で使用使用する紙芝居の 作成
大阪府	特定非営利活動法人 エフ・エー	サロン活動の拡大 (夜ごはん食堂・ 気まぐれモーニング)	高知県	特定非営利活動法人 夢創房室戸迎鯨の杜	3世代で見守る次世代育成プロジェ クト (おばあちゃんの晩ごはん)
大阪府	特定非営利活動法人 ほほえみケア	福祉有償運送サービス事業 (ナビと してタブレットを活用)	福岡県	一般社団法人 生き方のデザイン研究所	いつでも・だれでも・気軽にサポー トプロジェクト (講座の実施)
兵庫県	NPO法人 はんしん高齢者 くらしの相談室	地域で支える！高齢者くらしのネッ トワーク	宮崎県	高鍋町発達障がい児・者 親の会 キャンパス☆きっず	親子で楽しむ体験教室 (料理、ヨガ、 書道、英会話、折り紙、陶芸)
兵庫県	特定非営利活動法人 みっくす	みっくす出版社による兵庫県明石市 大久保地域あそびマップづくり	宮崎県	ラーニングパーク	放課後等学習支援教室、宿題・各教 科のお困りお助け教室
奈良県	大宮地区自治協議会	環境委員会活動・支え合い委員会活 動・はぐくみ委員会活動	鹿児島県	なかよしパソコン お絵かきクラブ	なかよしパソコンお絵かきクラブ (高齢者と子どもがパソコンを使っ てお絵かき活動)
奈良県	フードバンク奈良	フードバンク活動充実のための業務 用冷蔵庫の設置事業	沖縄県	沖縄県聴覚障害児を 持つ親の会	聴覚障害児のプログラミング教室



2018年度 贈呈式の様子



2018年度 助成先団体の活動の様子

住民参加型福祉活動資金助成 関西地区合同贈呈式を開催

10月24日（木）に損保ジャパン日本興亜肥後橋ビルで関西地区の合同贈呈式を開催しました。大阪、兵庫、奈良、京都、滋賀、和歌山に所在する10団体にお集まりいただきました。各団体の活動内容の紹介と意見交換会を行い、それぞれの団体の活動内容に関しての活発な意見交換が行われました。



※その他の地区では、損保ジャパン日本興亜の支店と協力のうえ、助成先団体にて開催する予定です。

財団からのお知らせ

《世界アルツハイマーデー記念講演会を後援しました》

9月29日に東京で、「(公社)認知症の人と家族の会」東京都支部が主催する講演会が開催されました。講師である中村伸一先生は「人生100年時代の“健幸”学」をテーマに認知症との暮らし、認知症の家族との暮らしについてメッセージを送られました。



《「認知症の人と家族の会」全国研究集会を後援しました》

10月27日に茨城で「(公社)認知症と家族の会」が主催する全国研究集会が開催されました。当日は、朝田隆先生による基調講演「地域感覚の認知症ナウ」が行われました。



●財団では、毎年20名の介護福祉士を目指す学生に2年間奨学金を給付しています。

1992年から本制度を開始し、27年間で278名の方が対象となっています。奨学生の皆さんからは毎年3回、財団に学生生活の状況報告をもらっております。1年生からの報告では『初めての実習では年齢が離れた方が相手なので不安や緊張もあったが、学ぶことが多く充実した実習となった』、2年生からの報告では『実習は自ら介護計画を立案するなど、更に高度なものとなっている。また国家資格取得のため勉強中心の生活である』などの報告がきています。皆さん介護福祉士資格取得に向けて学業に実習にと充実した学生生活を過ごされています。また、卒業後は全国の特別養護老人ホーム等の介護関連施設で活躍されています。



2019年度に決定した奨学生の实習の様子

●財団が主催する研修会の叢書を発行しました。

当財団ホームページにも掲載しておりますので、どうぞご覧ください。また、冊子をご希望の方は当財団までご連絡ください。

- ・叢書94号 「ジェロントロジー研究会」報告書
(認知症などの)要介護高齢者の就労とQOL～frailな高齢者の社会とかかわり方を考える～

●2020年4月1日、損保ジャパン日本興亜福祉財団は、SOMPO福祉財団に名称変更します。

「海外助成」 助成先訪問 in ミャンマー



評価アドバイザー
玉懸光枝さん

これまで海外助成を行ったミャンマーの5つの団体に、海外助成の評価アドバイザーである玉懸さんが訪問し、各団体さんからお話を伺いました！

評価アドバイザーの玉懸さんは、株式会社国際開発センター経済社会開発部の研究員として現在ご活躍中です。

※詳細な報告書は当財団ホームページに掲載しておりますので、どうぞご覧ください。

【Free Funeral Services Society (FFSS)】 2012年度助成先：無償医療の提供などにかかる費用を支援

ミャンマーで、貧しい人々に無料で葬儀サービスを提供しているFFSS。葬儀代が高く、家族が入院しても治る見込みがなければ病院に会いに行けなかったりする状況に心を痛めた映画監督兼俳優のチョートウ氏が、妻のミンミンキンペさんや仲間たちと共に、2001年に設立した。

しかし、この活動は当時理解されず、チョートウ氏らはさまざまな形で圧力を受けた。妻と7日間、勾留されたこともあったという。それでも、常に貧しい人々に寄り添おうとするチョートウ氏らの姿勢は共感を呼び、FFSSを支援する寄付者の輪は国内外に広がり続けた。

最近、FFSSは、葬儀サービスに加えてクリニックと学校を新たに立ち上げた。クリニックでは無料で健康診断や治療を行い、学校では健康に関する知識を教えている。「教育こそが、社会や国を変革するための礎になる」というのが、夫妻の信念だ。

すべての人が安心して人生を全うし、すべての子どもたちが教育を受けられる社会を実現するために、彼らの挑戦は続く。



【Myanmar Independent Living Initiative (MILI)】 2014年度助成先：障害者への補助器具の提供と移動支援

MILIのオフィスを訪ねると、車椅子の男性と、小柄な女性が迎えてくれた。代表のネイリンソー氏と、ユーユートーさんだ。ネイリンソー氏は3歳でポリオに罹患し、歩けなくなったが、複数の障害者支援団体で経験を積み、2011年にMILIを立ち上げた。一方、ユーユートーさんは、ネイリンソー氏が前の職場にいた時の同僚で、共に障害者の未来を語り合うようになり、MILIの創立に加わった。

MILIは、バスの運転手らに障害者への接し方を教えたり、障害者に関する法律の策定を政府に働き掛けたりと、多岐にわたり活動している。2014年には損保ジャパン日本興亜福祉財団の助成金で車椅子や松葉杖を製作し配布したところ、障害者が積極的に外出するようになり、「人生が変わった」と喜ばれたという。2015年の総選挙では、車椅子利用者や視覚障害者も投票できるように全投票所にスロープを設置し、点字投票用紙を導入した。

近年、少しずつ整備が進み、海外の支援も本格化しつつあるが、課題は今なお多い。2人は「これまでのように政府が何かしてくれるのを待つのではなく、障害者自身が動き出せる環境をつくりたい」と、抱負を語った。



【Eden Center for Disabled Children (ECDC)】 2015年度助成先：障害者の独立性を育てる活動を支援

建物の中は、いたるところに愛情が溢れていた。花の名前がつけられた教室の入り口には可愛いイラストと子どもの顔写真が貼られ、トレーニング室に並ぶ運動器具や廊下に置かれた車椅子も、手入れが行き届いている。ここには現在、障害のある子どもが1,000人以上通い、筋力を鍛えたり勉強したりしているという。

施設を運営するエデンは、ミャンマーの障害児を支援するNGOだ。創設者のターウク氏は、以前、マレーシアにある痙攣性まひの子どものための施設やシンガポールの病院で、理学療法士として働いていた。稼ぎは良かったが、妻や子どもと離れて暮らす生活に限界を感じ、1998年の夏にミャンマーに戻った。

祖国に戻ったターウク氏は、障害児のための養護学校で校長をしていた老婦人、リリアンジーと出会い、彼女のアドバイスを受けながら2000年4月にエデンを立ち上げた。名前には、「愛情に満ちた」「共に生きる」という意味が込められている。

「金儲けばかり考えていた自分がこの仕事に巡り合ったのは、神のお導き」だと話すターウク氏。今日も、障害者に尊厳を与えようと取り組んでいる。

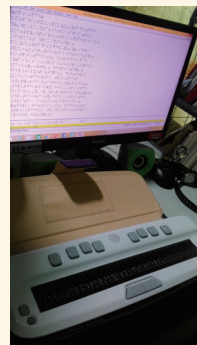


【Myanmar National Association for the Blind (MNAB)】 2016年度助成先：点字ディスプレイ、拡大読書機を支援

ヤンゴン中心部の北側に位置するインsein地区。大通りをそれて住宅街の路地を進むと、正面に現れた二階建ての家屋がMNABのオフィスだった。1996年の創設以来、視覚障害者が自立して生きるための支援を行っている団体だ。政府から認可されるのに17年を要するなど不遇の時代もあったが、海外の団体や支援者とも連携しつつ成長を遂げ、現在は国内に3つの支部を構え、会員数も800人に上る。

二階が上がると、事務局長のヤーミンさんが笑顔で出迎えてくれた。生まれた時から視覚障害があったヤーミンさんは、成人しても仕事を得られず、ネイリンソーさんが立ち上げたMILIでボランティアをしながら、文章の書き方や仕事の進め方を学んだ。その後、南インドやデンマークで数カ月ずつ障害者向けの研修に参加する機会に恵まれたヤーミンさんは、帰国してMNABの委員を引き受け、2017年に事務局長に就任した。

ミャンマーでは、視覚障害のある子どもは学校に通わせてもらえないことが多い。「盲学校の存在を周知し、視覚障害者にとって教育が大切であることを発信したい。」そう意気込むヤーミンさんの顔は、使命感に輝いている。



【Disabled People's Development Organization (DPDO)】 2017年度助成先：障害者への補装具などを支援

その日は、土砂降りだった。車や地面を叩きつけるような雨音が響く中、細い路地をタクシーでゆっくり進む。DPDOのオフィスに着くと、理事のブライアンゾー氏が労うような優しい笑顔で迎えてくれた。

DPDOは、障害者の生活の質を改善し、社会参加を促すために2003年に設立されたNGOである。事業の柱は研修だが、2017年に損保ジャパン日本興亜福祉財団から受けた助成金は、マグウェ管区の障害者に車椅子や松葉杖を届けるために使ったほか、ウェブサイトの構築やスタッフの育成に充てたという。

ブライアンゾー氏は視覚障害者だが、スマートフォンの音声認証機能を駆使してメールの送受信をこなす姿に不自由さは感じられない。「テクノロジーを使いこなせば、障害を乗り越えられるのです。」

以前はマッサージ師をしていたが、EDENを創設したターウク氏と出会い、障害者の人権問題に目覚めたという。ネイリンソー氏が立ち上げたMILIとも連携し、コミュニティーベースで活動を続けている。

「社会を変革し、障害者の人権を守りたい。」そう話すブライアンゾー氏の表情には、プライドと誇りが浮かんでいる。

